

2011.2.9
JFMA FORUM 2011

UNIVERSAL DESIGN

ユニバーサルデザインを解くキーワード
オフィスのユニバーサルデザインを廻る多様な視点

似内志朗

JFMAユニバーサルデザイン研究部会

INDEX

2010年度 UD研究部会の活動

ミッション／UD認証制度へ向けた活動／マンスリーミーティング

ユニバーサルデザインを解くキーワード

- 1 UDの価値を「見える化」する
- 2 オフィスのUDは Design for eachへ
- 3 義務からCSRへ、CSRからビジネスへ
- 4 UDはダイバーシティを寛容する「大きな器」
- 5 UDは公共性。しかし使いやすいほどよいのか

ユニバーサルデザインとは何か

■ **定義** 老若男女・障害の有無を問わず、**できるだけすべての人々**にとって、**使いやすく、快適で、わかりやすい**製品・環境・情報づくりを、**特殊な配慮を加えることなくめざす**考え。

■ ユニバーサルデザイン7原則



ロナルド・メイス(1941～98)

- 原則1. **公平さ** (誰でも大丈夫)
- 原則2. **柔軟さ** (どうやっても大丈夫)
- 原則3. **直感的・単純さ** (考えなくても大丈夫)
- 原則4. **情報認知の容易さ** (頑張らなくても大丈夫)
- 原則5. **誤用に対する寛容さ** (間違っても大丈夫)
- 原則6. **身体的負担の少なさ** (無理しなくても大丈夫)
- 原則7. **移動・使用空間のゆとり** (どこに行っても大丈夫)

原文: Center for Universal Design, 1997

／和訳: JFMAユニバーサルデザイン研究部会

Design for All
Inclusive Design
Lifespan Design
共用品 (Kyoyo-hin)

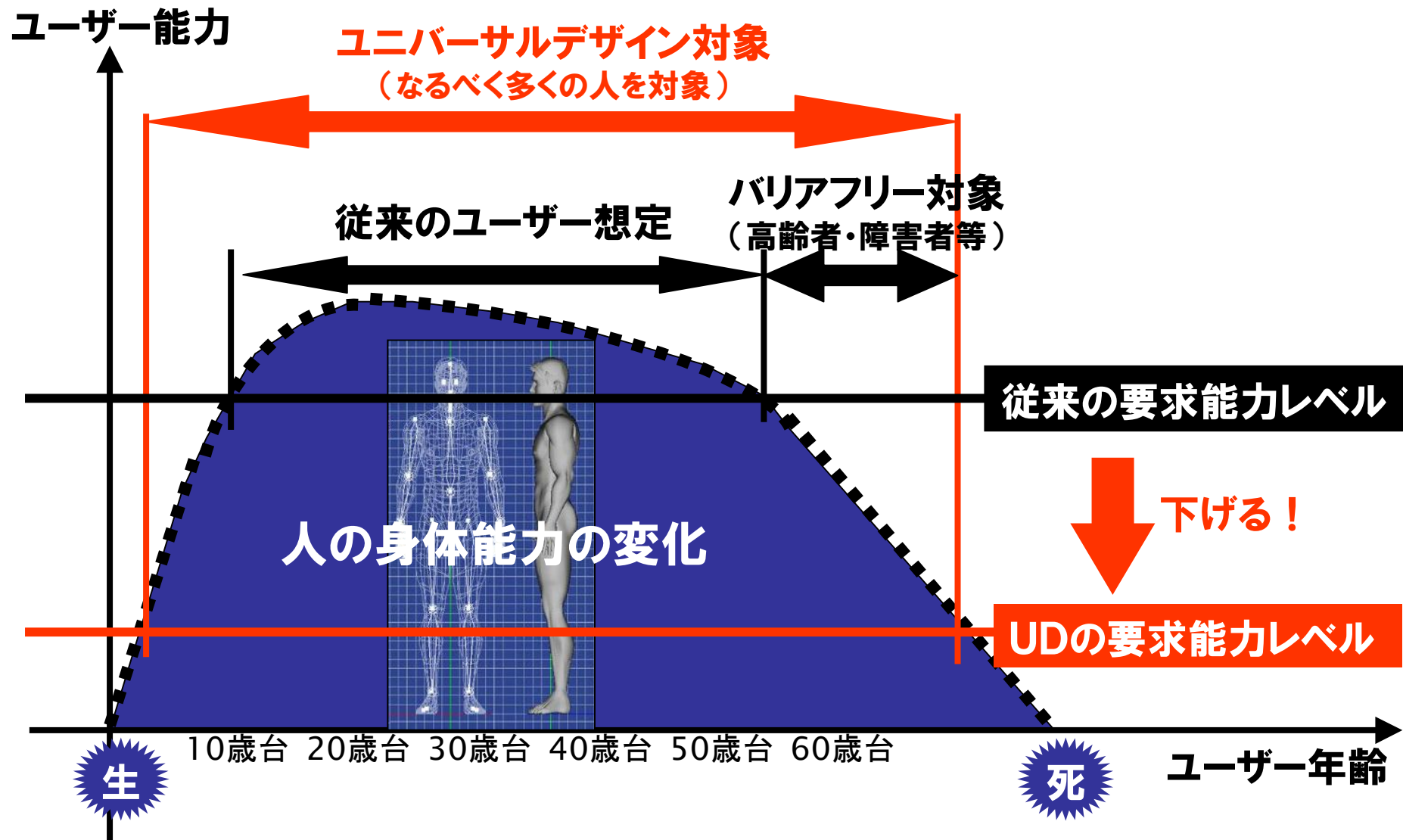
⇔ Diversity

(UDはdiversityを寛容する大きな器)

ユニバーサルデザインとは何か

バリアフリーの視点との違い。

要求能力レベルを下げると、ユーザーは自然と拡大する。



研究部会のミッション (2003-)

ワークプレイスへのユニバーサルデザイン導入の**価値を明らかにし**、
ユニバーサルデザイン導入の**道具立てをつくる** (「触媒」の立ち位置)



これまでの活動

ワークプレイスのユニバーサルデザイン というニッチな領域を研究。

2002	国際UD会議(横浜)	WWP横浜会議	国内企業調査 (JFMA)
2003	WWPプラハ会議	WWPダラス会議	日本建築学会大会
	FM国際大会	FM国際大会2004	企業事例セミナー
2004	国際UD会議(ブラジル)	ソウル大学講演	米国企業調査 (IFMA)
	報告書UDガイドライン発刊	北海道UDシンポジウム	FM国際大会2005
2005	WWPフィラデルフィア	UDレビュー (UDC)	FM国際大会2006
	UDビル評価		
2006	国際UD会議(京都)	日本建築学会大会(3編)	
	報告書CASUDA発刊	ウィークリーセミナー	JFMAフォーラム2007
2007	報告書UD導入事例発刊	UD導入調査(LB社)	JFMAフォーラム2008
2008	報告書 講演記録	UD週末セミナー(22講演)	JFMAフォーラム2009
2009	月例セミナー(10講演)	UD認証制度の検討	JFMAフォーラム2010
2010	月例セミナー(9講演)	UD認証準備会議(6回)	JFMAフォーラム2011

■UD研究部会メンバー(アクティブメンバーのみ記載、50音順)

◎似内(日本郵政／部会長)、○間瀬(NPO法人空間のユニバーサルデザイン総合研究所／副会長)、児玉(東京電力)、浅田(岡村製作所オフィス総合研究所)、池田(シンプレックス不動産投資顧問)、伊藤(ハーマンミラージャパン)、今井(フォースアソシエイツ)、落合(富士通病院)、加藤(野村証券)、川野(プラス)、観音(構造計画研究所)、小町(企業年金連合会年金運用部)、沢田(清水建設技術研究所)、塩川(NTT都市開発)、曾川(ユニバーサルデザインコンソーシアム)、諏訪(東京海上日動ファシリティーズ)、中嶋(ワークショップマナ)、仲田(コンセプトライン)、成田(大成建設FM推進部)、西端(プラススペースデザイン)、野瀬(FM総合研究所)、富本(イトーキ)、三ツ木(かんぽ生命)、森山(日本郵政)、加藤(JFMA事務局)

■月例セミナー [オール部会での企画・開催]

- 1.25 伊藤政人(ハーマンミラージャパン) 持続可能性への追求について LEED
- 2.26 坂本邦雄(東電ハミングワーク事業総括部長) 東電ハミングワーク
- 4.6 清水忠男(千葉大学名誉教授) 製品、環境分野のユニバーサルデザイン
- 4.26 平松宏城(CSRデザイン&ランドスケープ代表取締役) 社会責任不動産投資
- 5.25 大原一興(横浜国立大学教授)
- 6.10 森山政与志(日本郵政) 復職後10年の経験
- 8.23 平野隆(富士通デザイン) 富士通のUD・環境への取り組み
- 9.28 成田一郎(大成建設FM推進部) 5時から男のゴジカラ村のお話し
- 12.3 成澤廣修(文京区長) 男の育児休暇(子育てとダイバーシティ)

■UD認証検討会議 [タスクチームでの活動]

上記のうち、間瀬、加藤、浅田、富本、仲田、児玉、伊藤、似内

INDEX

2010年度 UD研究部会の活動

ミッション／UD認証制度へ向けた活動／マンスリーミーティング

ユニバーサルデザインを解くキーワード(部会の議論から)

- 1 UDの価値を「見える化」する
- 2 オフィスのUDは Design for eachへ
- 3 UDはオフィスの生産性を支えるベース性能
- 4 義務からCSRへ、CSRからビジネスへ
- 5 UDは公共性。しかし使いやすいほどよいのか

1 UDの価値を「見える化」する

- ・輪郭のハッキリしないUDをユーザーにとっての性能として明確化。
- ・これまで、UDを実現する3つのツールをつくった。
[UDガイドライン(2004)、CASUDA(2006)、UDレビュー(2008)]
- ・評価基準(ユニバーサルデザイン総合評価システム／CASUDA)で定量化・格付評価、「見える化」。
- ・今後、CASUDAをベースにして、評価基準の見直し、UD認証制度化まで検討。

これまでの成果 (UDを実現する3つのツール)

ガイドライン、評価手法、UDレビュー手法を開発。

UD達成度を評価する

- CASUDA**
- ① 建築スケルトン
 - ② 建築インフィル
 - ③ 運用・維持



認証制度へ
向けた検討

考える
(見直す)

つくる
(プロジェクト段階)

設計プロセスにUDを織り込む

- UDレビュー**
- ① 建築スケルトン
 - ② 建築インフィル(一部)

UD導入のガイドライン

- UDガイドライン**
- ① 建築スケルトン
 - ② 建築インフィル
 - ③ 運用・維持

事例

ガイドライン



つかう
(建物の目的)

つかう
(運用段階)

しくみ

考える

つくる



UD チーム (cold team)

UDに精通した設計者が代替案を提示。
必要に応じ、多様なユーザーが加わる。

設計チーム (hot team)

一般の設計者は必ずしもUDに通じていない
(現実)

UD review 1

基本的方向、UD対象、UD水準設定

UD review 2

ゾーニング、動線計画、高低レベル
アプローチ、トイレ、サイン環境

UD review 3

プランニング、視覚障害者誘導ブロック配置、
出入口幅員、サイン計画

UD review 4

段差詳細、安全性確保、各アイテムの使いやすさ
色彩計画、照明計画、UD的アイデア

UD review 5

UD検証、モックアップ、
ディテール点検調整、維持運用計画

基本構想

基本計画 (1/500)

基本設計 (1/200)

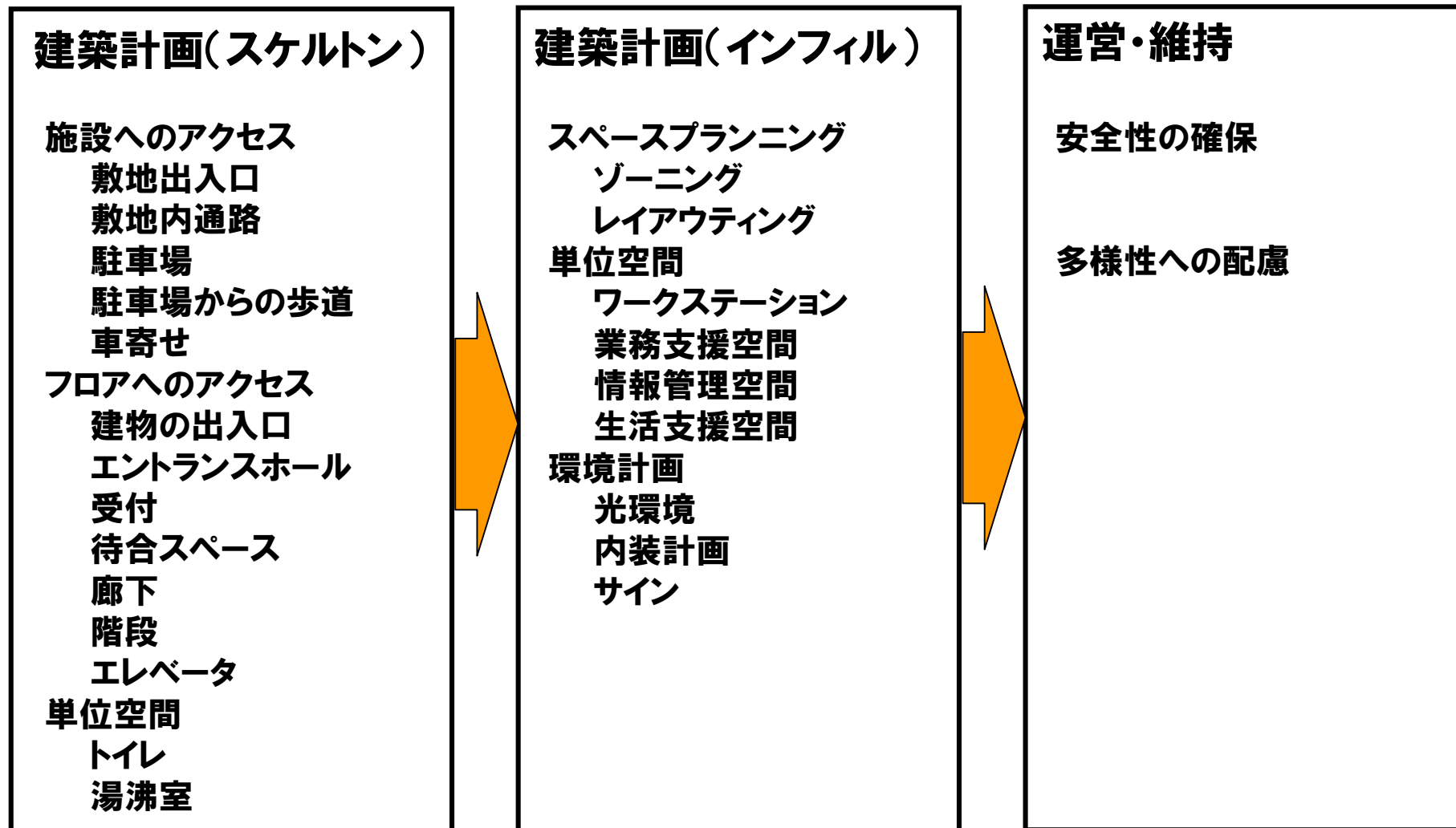
実施設計

建設工事

運用・維持

UDガイドライン

プロジェクト管理段階、運営・維持段階において、UDを実践するために不可欠な事項(CSF: Critical Success Factors)を洗い出した。



UDガイドライン

① ユーザーのニーズ

・各CSFの目指すべき目的は何かを定性的に記述

② 基本的な対応事項 must

ハートビル法など法的基準に基づく事項、安全上必要な事項などコストに関わらず守るべきレベル。

+

③ ユニバーサルデザインの視点 best

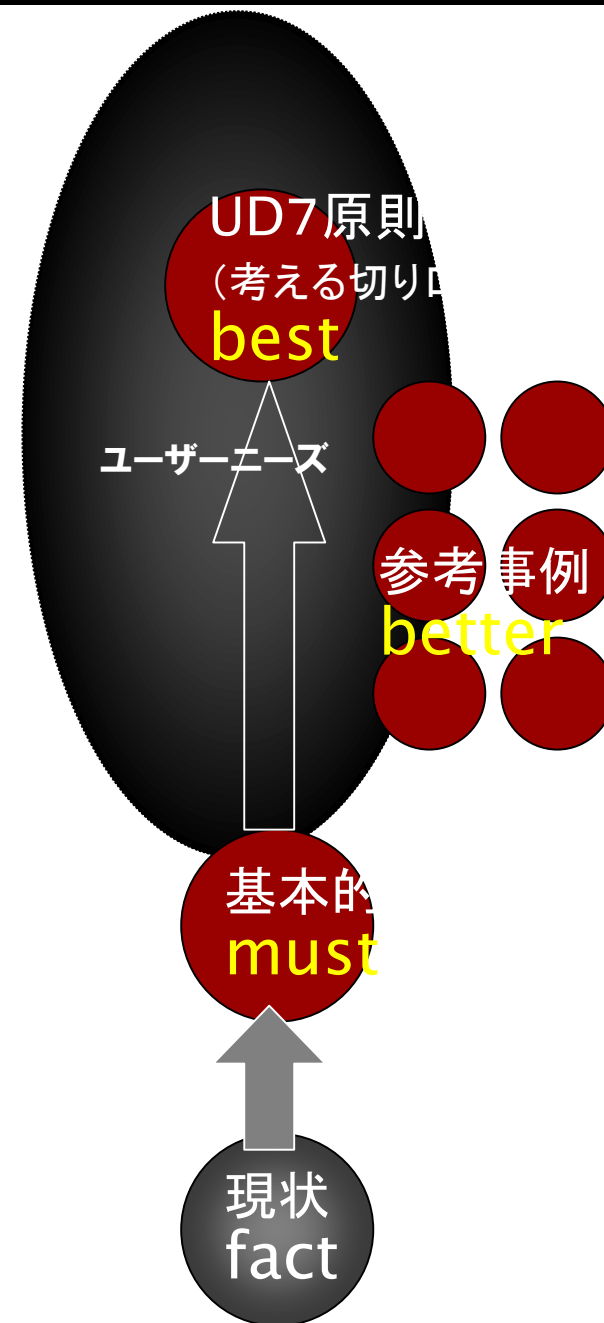
ワーカーの満足度・生産性、より高い安全性、あるいは企業イメージ改善といった、より望ましい方向性。

●ロン・メイスUD7原則の視点で評価

①公平さ、②柔軟さ、③直感的・単純さ、④情報認知の容易さ、⑤誤用に対する寛容さ、⑥身体的負担の少なさ、⑦移動・使用空間のゆとり

④ 参考事例 better

・現実的な解決事例を掲載（計画上の創意工夫）



UDガイドライン

UD7原則(基本的な考え方)	ガイドライン(基本要件)
①公平性(Equitable Use)	<ul style="list-style-type: none">・誰でも利用できる・すべての人が同じ方法で利用できる・特定のユーザーを差別したり、排除しない・プライバシー・セキュリティ・安全性をすべてのユーザーに平等に提供する・すべてのユーザーに魅力的なデザイン
②単純さ(Simple and Intuitive Use)	<ul style="list-style-type: none">・ unnecessary 複雑さを避ける・ユーザーの予想や直感どおりに操作できる・ユーザーの様々な教育レベル・言語レベルに対応している・重要度に応じて情報を整理する・操作中や完了時に適切な指示やフィードバックを提供する
③情報認知の容易さ・わかりやすさ(Perceptible Information)	<ul style="list-style-type: none">・絵や文字、触覚など複数の手段を用意する・重要な情報と、その周辺のコントラストを明確にする・重要な情報は読みやすくする・デザインの各要素の違いがはっきりと説明できること・五感に障害を持つ人々が通常使用している技術や装置との互換性に配慮する
④安全性・誤用に対する寛容性(Tolerance for Error)	<ul style="list-style-type: none">・危険やミスを最小限にするようデザイン要素を配置する・危険やミスに対してきちんと警告する・失敗したときの安全策・対処策を兼ね備えている・注意を要する操作を無意識にしてしまうことがないように工夫されている
⑤柔軟性(Flexibility in Use)	<ul style="list-style-type: none">・使い方の選択肢を与える・右手でも左手でも使える・正確な操作をしやすいように工夫する・ユーザーのペースに合わせられるようにする
⑥負担の少なさ(Low Physical Effort)	<ul style="list-style-type: none">・自然な姿勢を維持したまま使用できる・無理のない力で操作できる・反復動作を最小限にすること・力を持続させなければならないような状況を最小限にする
⑦移動・使用空間のゆとり(Size and Space for Approach and Use)	<ul style="list-style-type: none">・重要な要素は座位からでも立位からでも見えるようにする・座位でも立位でも操作に必要な箇所すべてに楽に手が届くようにする・様々な手の大きさに対応している・補助装置や介助者のための十分なスペースがある

1 ユニバーサルデザイン(UD)は、「オフィスのベース性能」である

●オフィスは「知」を生み出す場である。

●「受動的役割」は、ワーカーが「知」を生み出すに際してのネガティブな要因を取り除き、自己の能力をバリアなく、かつ快適に発揮できる環境を整えることである。この部分は、UDとニヤリー・イコール。

ワークスタイルの変化

- ・ITの進化
- ・「いつでもどこでも(anytime, anywhere)」



センターオフィスの役割の変化

- ・作業のための場から、「知」を生み出すための場へ

「知」を生むためのオフィスの性能 (2つの側面)

能動的役割

- ・ワーカーが知を生むキツカケ
- ・経営者のビジョンを伝える場
- ・場のマネジメント/ナレッジマネジメント

下支え

受動的役割

- ・ネガティブな要因を取り除く
- ・快適に能力を発揮できる環境
- オフィスのベース性能≡ユニバーサルデザイン

≡UD

最近のオフィスをめぐる議論

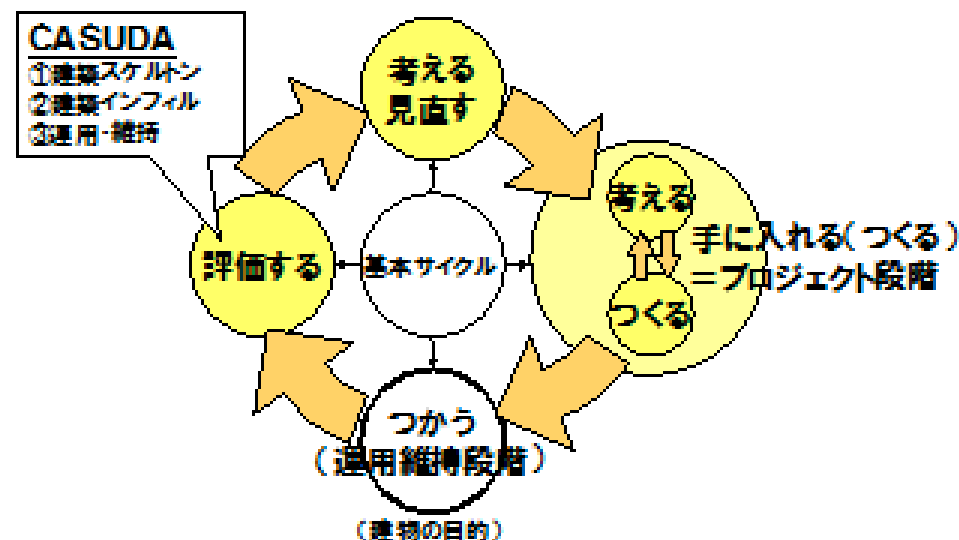
2 オフィスのUDの達成に必要な重要項目を抽出した

●ファシリティマネジメントの視点から、UD達成に不可欠な重要事項(CSF: Critical Success Factors)を定めた。

●プロジェクト管理段階(「手に入れる」段階)の建築計画23項目

- ・スケルトン(建物主要部):14項目
- ・インフィル(内装・設備等):9項目

●運用維持段階(「つかう」段階):1項目



3 オフィスのUD総合評価手法「CASUDA」を開発した

- CASUDA =Comprehensive Assessment System for Universal Design Achievement
- 「基本的対応事項(MUST)+UDの視点(BEST)」という2段階評価

1 基本的な対応事項(MUST)

ハートビル法など法的基準に基づく事項、安全上必要な事項などコストに関わらず守るべきレベル。

+

2 UDの視点(BEST)

ワーカーの満足度・生産性、より高い安全性、あるいは企業イメージ改善といった、より望ましい方向性。

●ロン・メイスUD7原則の視点で評価

- ①公平さ、②柔軟さ、③直感的・単純さ、④情報認知の容易さ、⑤誤用に対する寛容さ、⑥身体的負担の少なさ、⑦移動・使用空間のゆとり)

4 CASUDAによるビル評価で、こんなことがわかる

① オフィスごとのUD評価

評価シートに沿って、JF MAウェブサイト上で記入すると、評価対象ビルのUD評価ができる。記入時間は約2-3時間。

	基本的対応 MUST	UDの視点 BEST	総合評価
スケルトン	3.88	2.86	3.37
インフィル	4.12	3.08	3.60
運営・維持	—	3.00	3.00
			3.32
			レベルB

総合評価

スケルトン
建築物の構造体・内外壁など固定的な部分

インフィル
建築物の内装・家具・什器・設備等の比較的固定的でない部分

運営・維持
建設後、実際に使われる段階



項目詳細例
(スケルトンの「基本的対応」)



項目詳細例
(インフィルの「UD視点」)

オフィスのユニバーサルデザイン評価手法(2006)

CASUDA

Comprehensive Assessment System of Universal Design Achievements



現在リバイズ中。
法改正、新技術
の反映

ユニバーサルデザイン評価・認証の制度化を検討(2009-)

■目的

オフィスビルのユニバーサルデザイン化を促進し、ビルの資産価値を高めるとともに、利用者(テナント、ユーザー)に良好な環境を提供すること。

■メリット

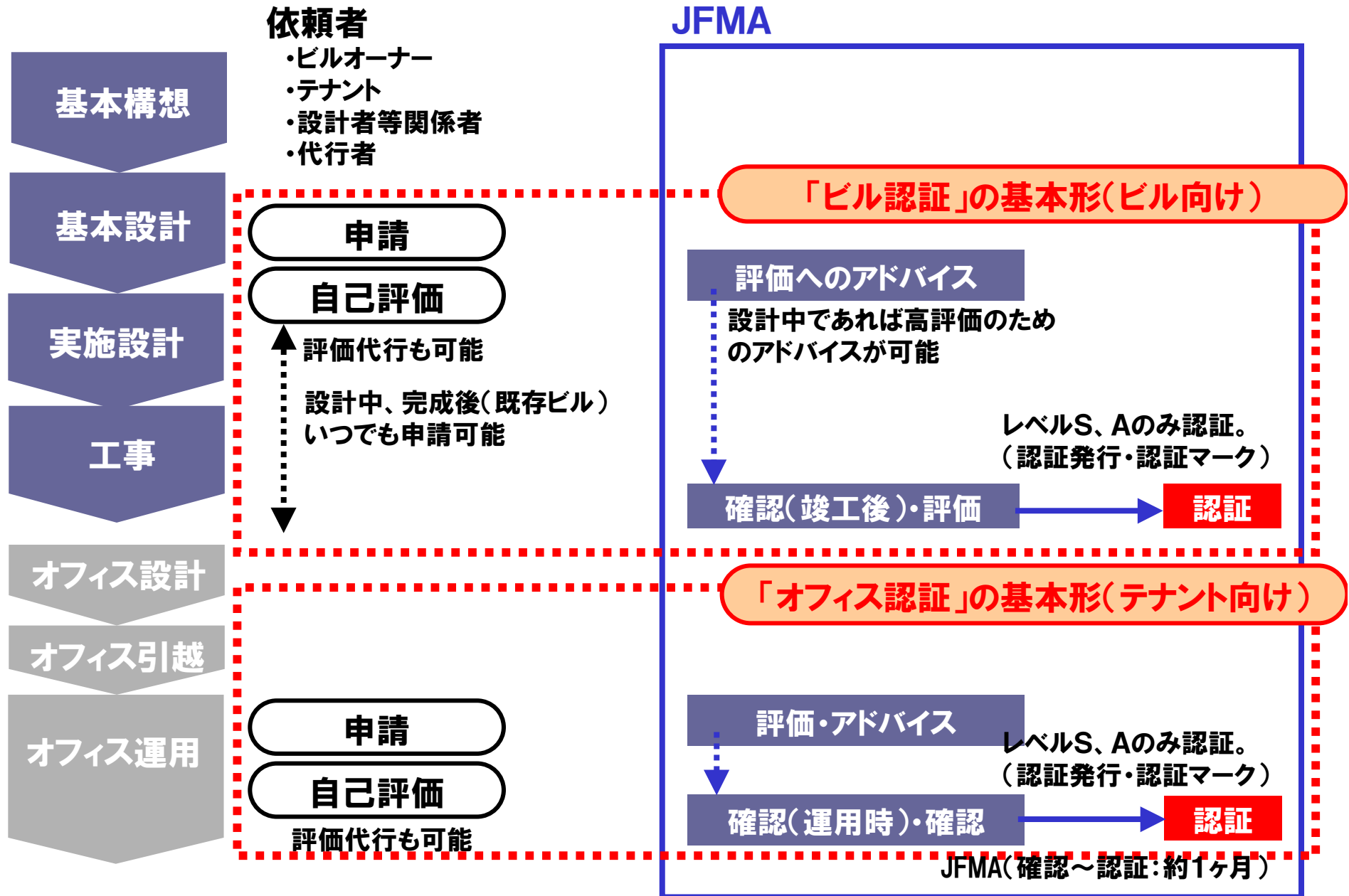
ビルオーナーにとって

- ・ビル計画のユーザビリティレベルの目安。
- ・客観的評価により、UDレベルを明示。

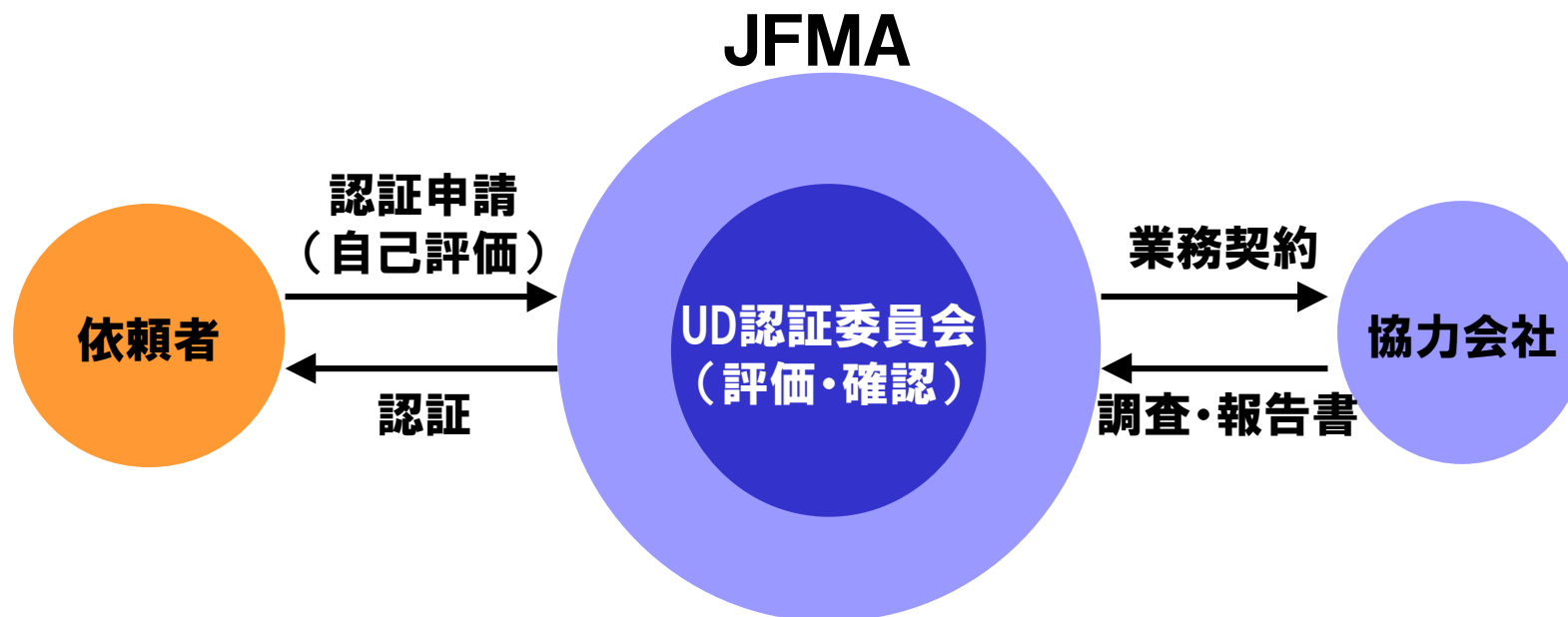
テナントにとって

- ・入居するオフィスビル選定の目安。
- ・従業員へ優れたオフィスワーク環境を提供。

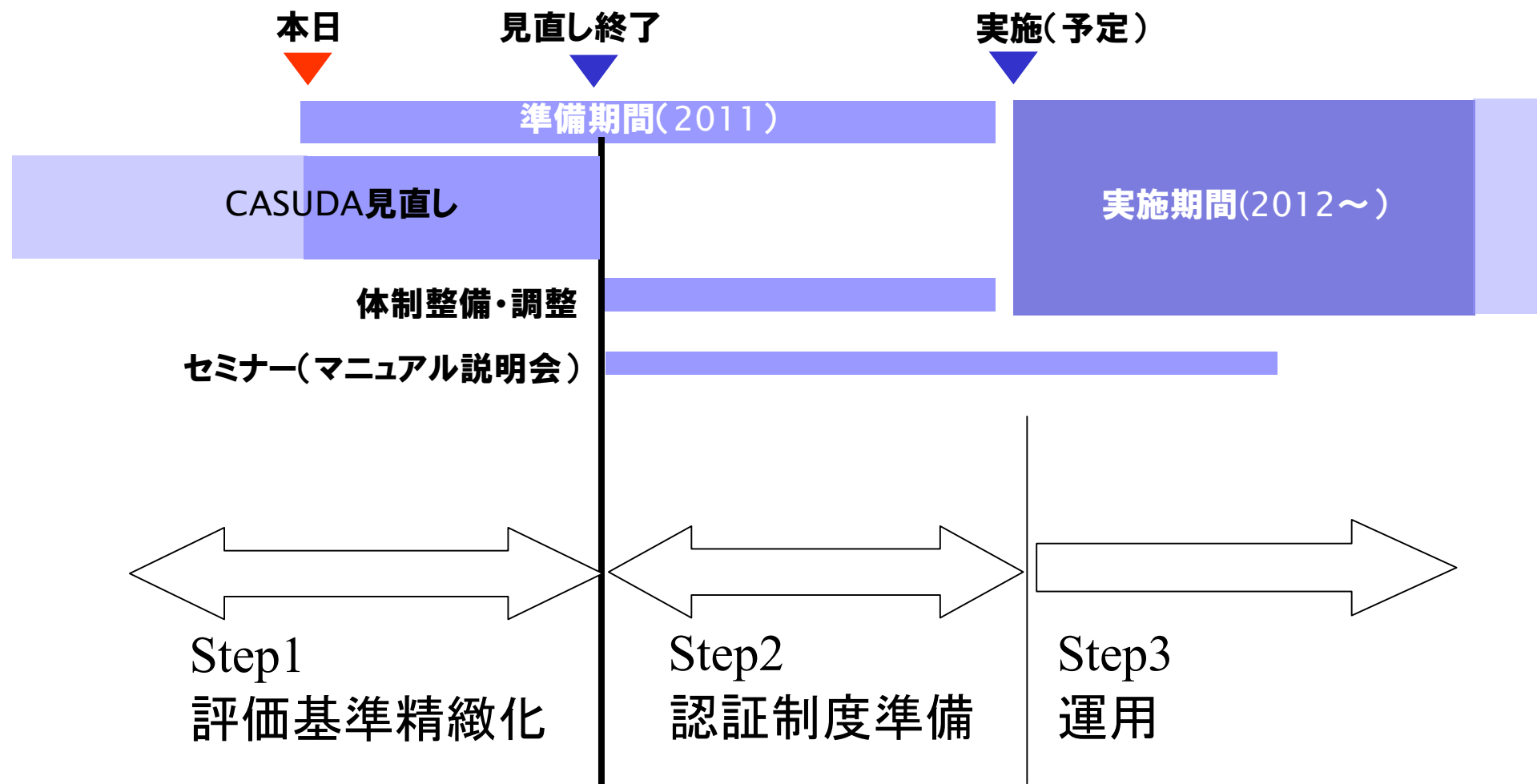
UD評価・認証の業務フロー(案)



- ・依頼者が**申請窓口 (JFMA事務局)**へ**認証**を申請。
- ・**UD認証委員会 (JFMA内に設置)**が**調査・評価、認証可否**を判断。
- ・JFMAより**認証交付**。(JFMA事務局が**決裁等事務**)
- ・**調査・評価等の実務は、専門知識のある協力会社に委託**。
(**JFMA・UD研究部会**による**監修**)



スケジュール(案)



INDEX

2010年度 UD研究部会の活動

ミッション／UD認証制度へ向けた活動／マンスリーミーティング

ユニバーサルデザインを解くキーワード

1 UDの価値を「見える化」する

2 オフィスのUDは Design for eachへ

3 UDはオフィスの生産性を支えるベース性能

4 義務からCSRへ、CSRからビジネスへ

5 UDは公共性。しかし使いやすいほどよいのか

バリアフリー新法誘導基準(事務所)との比較

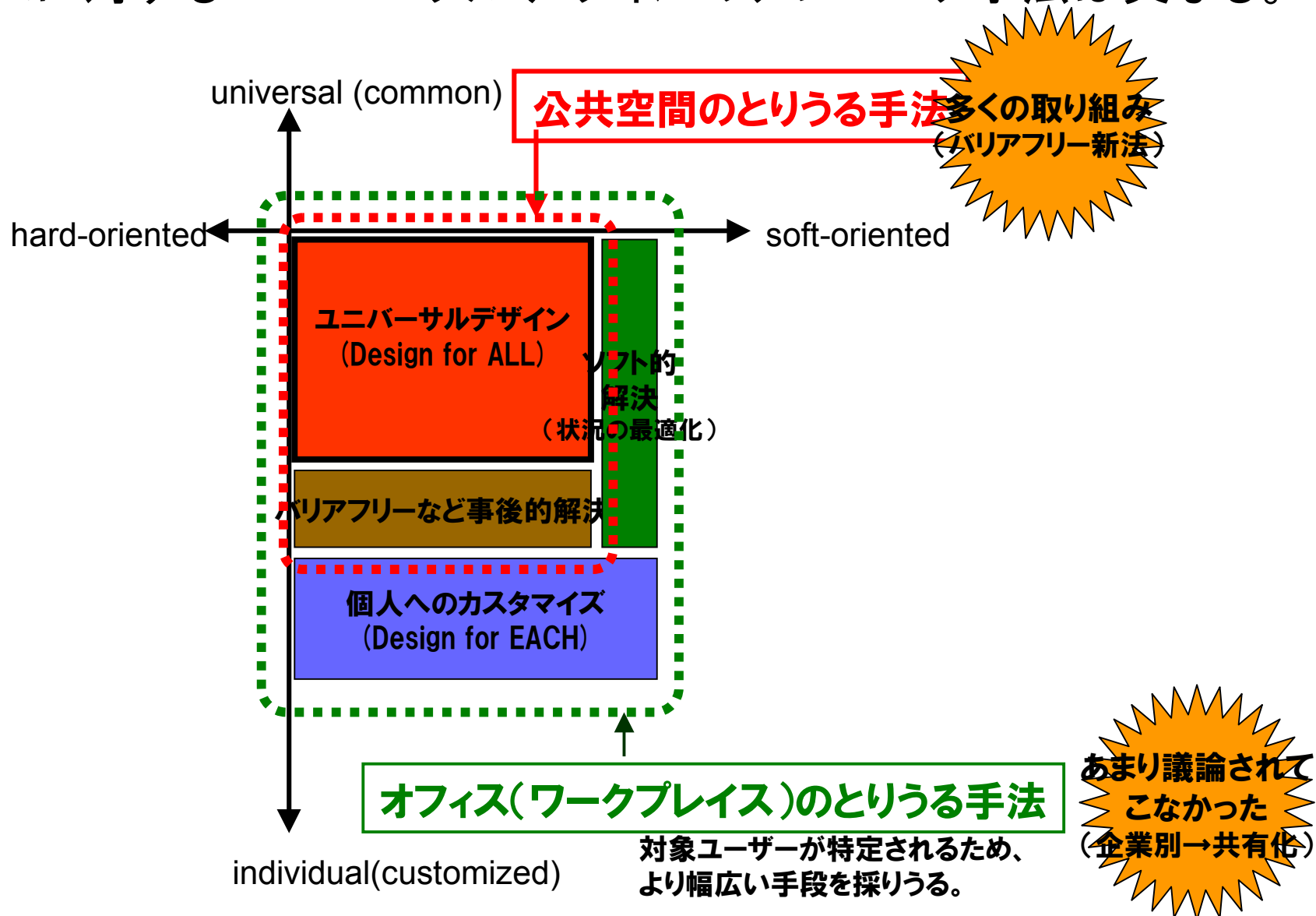
	ビル評価	オフィス評価	
	スケルトン	インフィル	オペレーション
基本的対応事項	パブリック エリア		
UD視点			
	バリアフリー新法	CASUDA(UD認証)	

2 オフィスのUDは Design for eachへ

- ・UDは「**Design for all**(すべての人のためのデザイン)」と言われる
- ・オフィスUDではユーザー(ワーカー)が特定されるため、一歩進んだ「**Design for each**(それぞれのためのデザイン)」が可能。
- ・UNIVERSAL(普遍)からPERSONALISE(個)へ。
- ・それを可能にする技術の進歩。

公共空間とオフィスのユニバーサルデザイン

不特定多数が利用の公共空間と、特定ユーザーが主に使うワークプレイスに対するユニバーサルデザインのアプローチ手法は異なる。



Design for each を可能にする技術の進歩(事例) JFMA 2011

「知的照明システム」 同志社大学 三木光徳教授
(大手不動産会社、電機メーカー、家具メーカー等が参画)

- 生産性・創造性の向上と省エネルギーを実現
ワーカーは、仕事内容や好みに合わせ光環境を簡単に選べる
→ワーカーの知的生産性・創造性向上が期待。
→従来の蛍光灯照明設備と比べ、消費電力50%以上削減可能。

- ワーカー個人個人が、天井照明(照度、色温度)を自在に選択。
ワーカーにpersonaliseした光環境で働くことができる。

2011年度
JFMA大賞
技術賞受賞



[同志社大HP,コクヨHPから引用・加筆]

INDEX

2010年度 UD研究部会の活動

ミッション／UD認証制度へ向けた活動／マンスリーミーティング

ユニバーサルデザインを解くキーワード

- 1 UDの価値を「見える化」する
- 2 オフィスのUDは Design for eachへ
- 3 UDはオフィスの生産性を支えるベース性能
- 4 義務からCSRへ、CSRからビジネスへ
- 5 UDは公共性。しかし使いやすいほどよいのか

3 UDはオフィスの生産性を支えるベース性能

- ・オフィスの**能動的性能**（経営ビジョン共有化、コミュニケーション活性化など）は、**受動的役割**（安心感、つかいやすさ、不快な要素がない）の上に成立する。
- ・**受動的役割**はUDとほぼイコール。
- ・UDは「特別な配慮」ではなく「**当たり前な配慮**」。（地味な存在？）

UDは「オフィスのベース性能」である(再掲)

●オフィスは「知」を生み出す場である。

●「受動的役割」は、ワーカーが「知」を生み出すに際してのネガティブな要因を取り除き、自己の能力をバリアなく、かつ快適に発揮できる環境を整えることである。この部分は、UDとニヤリー・イコール。

ワークスタイルの変化

- ・ITの進化
- ・「いつでもどこでも(anytime,anywhere)」



センターオフィスの役割の変化

- ・作業のための場から、「知」を生み出すための場へ

「知」を生むためのオフィスの性能 (2つの側面)

能動的役割

- ・ワーカーが知を生むキツカケ
- ・経営者のビジョンを伝える場
- ・場のマネジメント/ナレッジマネジメント

下支え

受動的役割

- ・ネガティブな要因を取り除く
- ・快適に能力を発揮できる環境
- オフィスのベース性能≡ユニバーサルデザイン

≡UD

最近のオフィスをめぐる議論

安全で快適な環境とは

フレドリクソン教授(ノースカロライナ大学心理学、1988)

Broaden-and-built theory of positive emotion

(JFMAカレント2006.5 市川陽子氏「満足度の高いワークプレイスはチームワークもいい！」)

能動的

何らかの要素
(ポジティブな感情の喚起)

知的生産性
モラル向上

セオ

受動的

ワークプレイス
安全性・快適性

YES

ポジティブな感情
(安心して快適な環境)

視野・行動範囲
の拡大

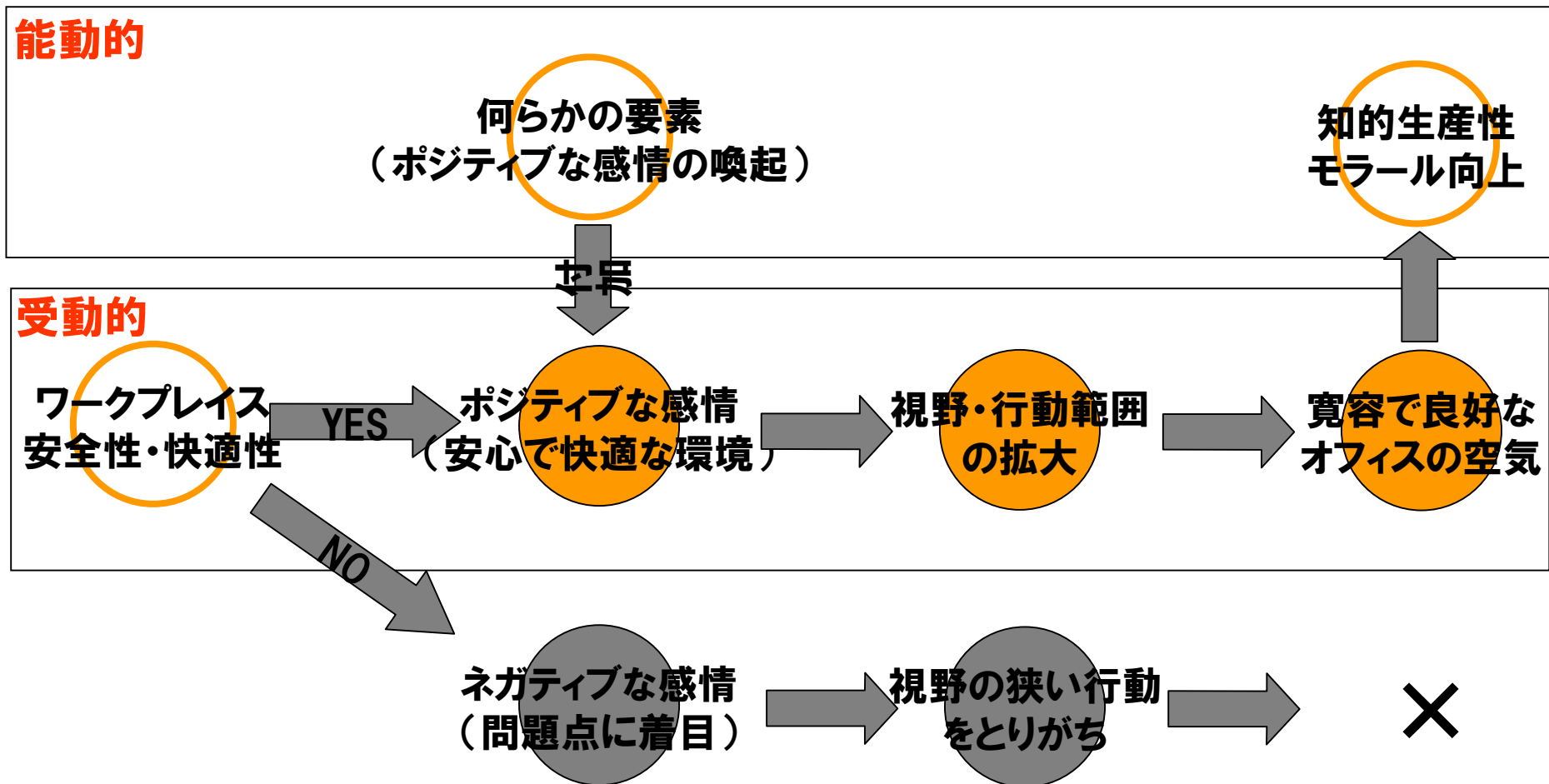
寛容で良好な
オフィスの空気

NO

ネガティブな感情
(問題点に着目)

視野の狭い行動
をとりがち

×



オフィスにおける受動的役割と能動的役割

知的生産性

経営ビジョン共有

創造的環境

ブランディング

コミュニケーション

能動的役割
(経営への貢献)

暗黙知の顕在

下支え

快適・リラックス

身体的低負荷

受動的役割
(≒UD)

ユーザビリティ
(使いやすさ)

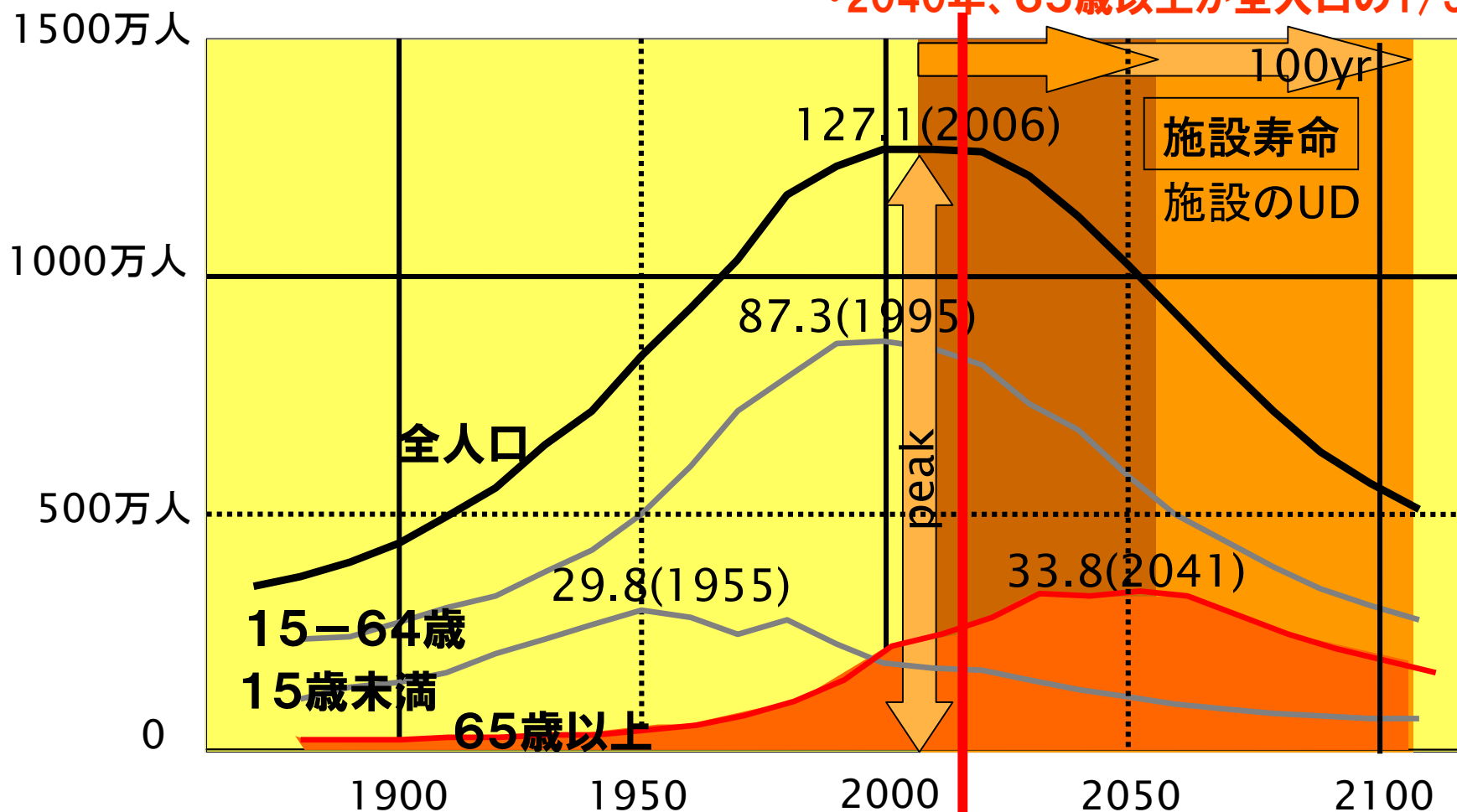
アクセシビリティ
(アクセスしやすさ)

安全・安心

日本の人口推移

いま建てるビル(50年、100年寿命)は、超高齢社会を生きていく。

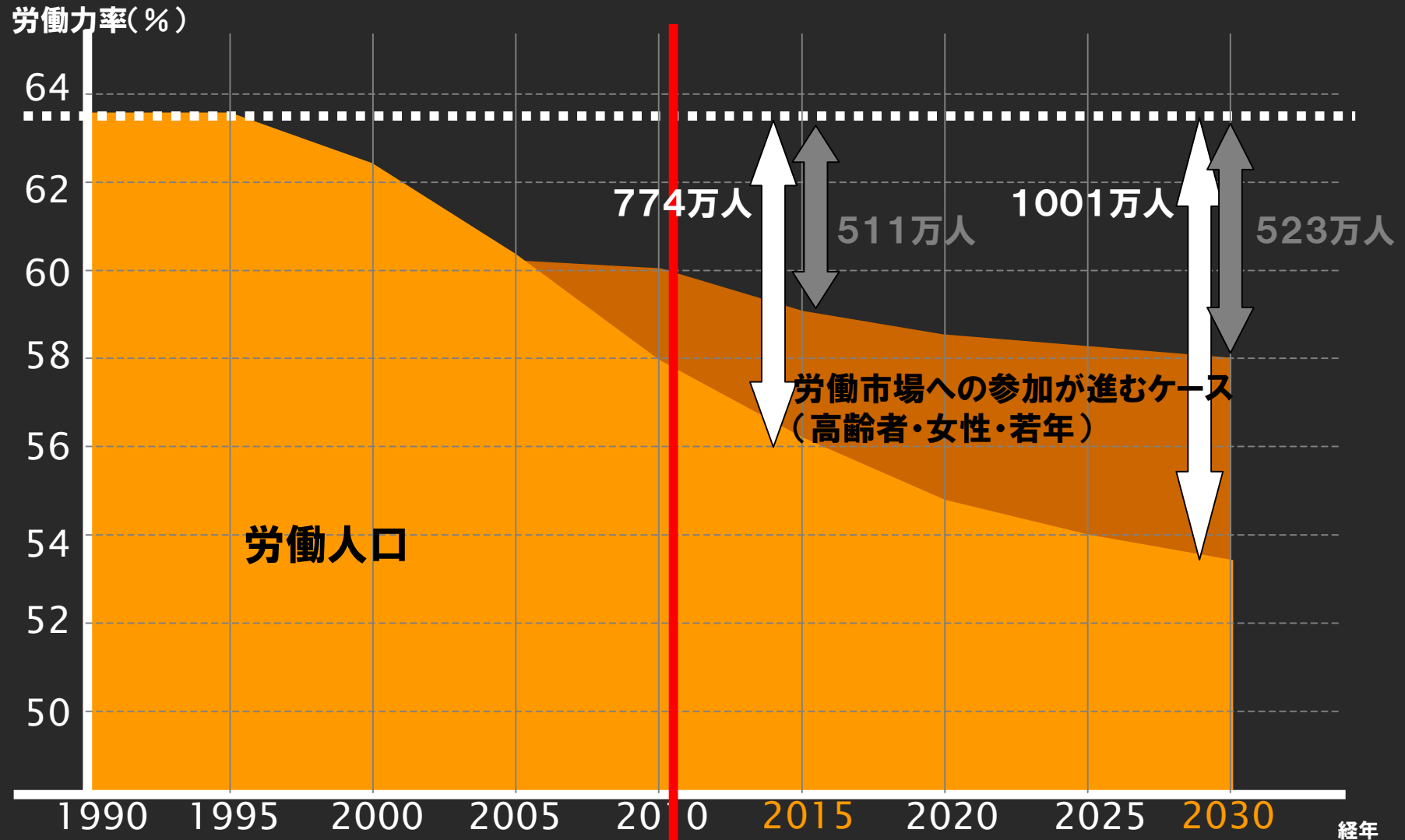
- ・現在、65歳以上が全人口の1/5超
- ・2015年、65歳以上が全人口の1/4
- ・2040年、65歳以上が全人口の1/3



[中津元次氏作成資料より引用]

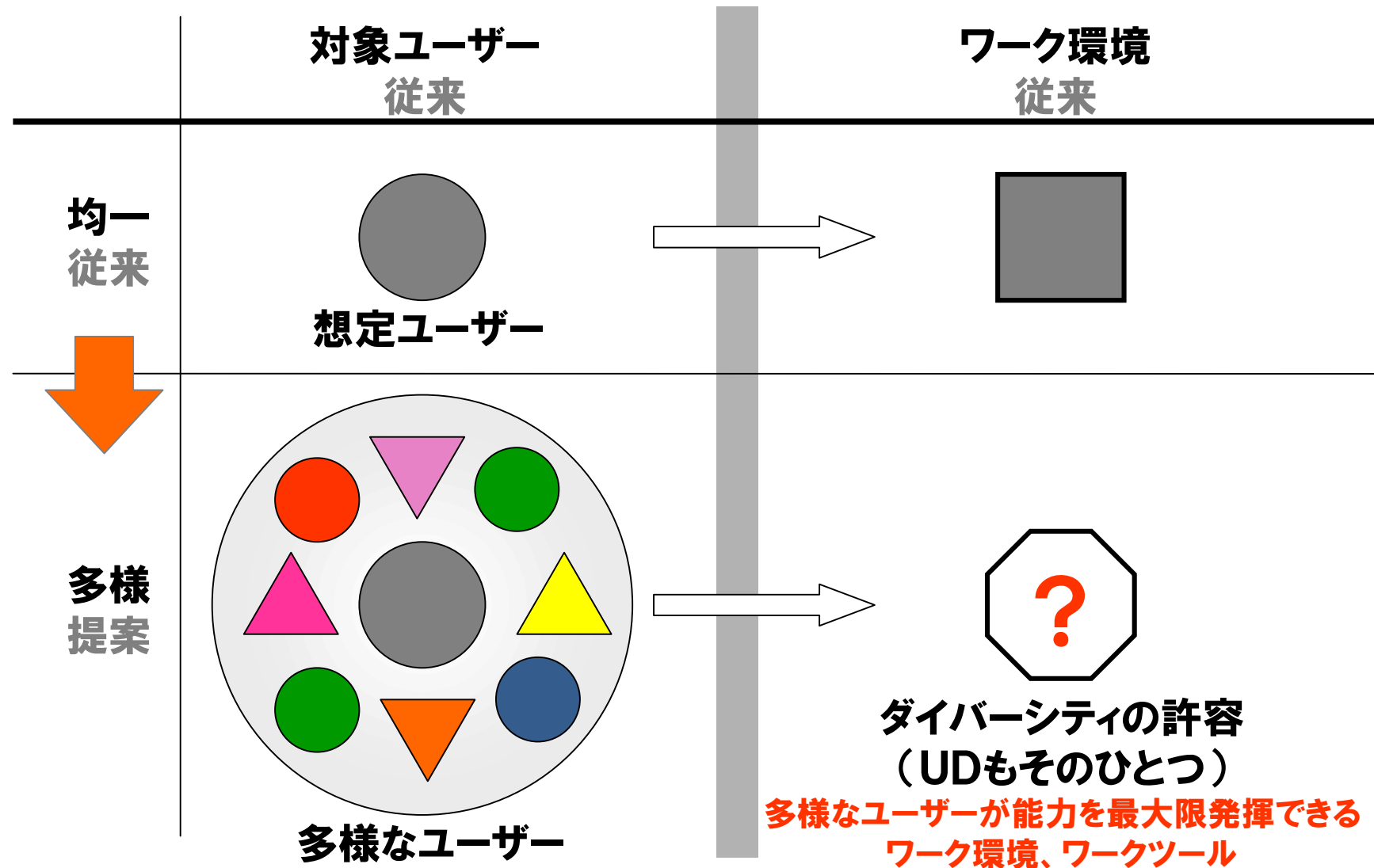
労働人口の需給予測

労働人口(生産年齢人口)激減の時代。雇用が回復するならば、
ワーカ―の多様化(高齢者・女性・外国人)は、恐らく避けられない。



UDがダイバーシティを寛容する大きな器

人口動態、グローバル化、モバイル化が、ワーカーとワークスタイルの多様化をもたらす。



INDEX

2010年度 UD研究部会の活動

ミッション／UD認証制度へ向けた活動／マンスリーミーティング

ユニバーサルデザインを解くキーワード

- 1 UDの価値を「見える化」する
- 2 オフィスのUDは Design for eachへ
- 3 UDはオフィスの生産性を支えるベース性能
- 4 義務からCSRへ、CSRからビジネスへ
- 5 UDは公共性。しかし使いやすいほどよいのか

4 義務からCSRへ、CSRからビジネスへ

・「ソラーレホテルズ・アンド・リゾーツ&スパ(昨年JFMA賞受賞)」は施設のアクセシビリティ向上改修、高齢者・障害者のための積極教育を行うことなどで、客室稼働率が2割から7割にアップ。ホテル再建の成功要因となった。

- ・切実な顧客ニーズに応える(真の顧客ニーズを見逃している)。
- ・高齢社会ビジネスにおいて、UDは有効なツールとなる。
- ・中沢信著 「バリアフリーは儲かる」
- ・「善意」ベースは脆い。ビジネスとして成立することで持続する。

マリオットホテルへのブランディングにあたって、滞在型リゾートホテルとしての商品特性を正しく捉えるならば、ハンディキャップを抱えているお客様にもお楽しみいただける可能性を秘めたホテル(施設、設備)であったにも関わらず、それに見合ったサービススペックを整えることがなく、機会損失をしていた。

中途半端なマーケティング、ハード運用、サービス提供のため
ポテンシャルを活かしきれず20~30%といった低い稼働率

稼働率の飛躍的な向上を実現(年20~30%→年70%へ)



アメリカのADA法準拠の高いバリアフリー仕様の施設であったが、日本の法令に準拠するよう詳細なハードの検証と整備項目を洗い出し、沖縄県当局と調整の上、県内初のバリアフリー新法に基づく認定を取得出来るまでにした。

◇ユニバーサルルームの特徴

- ・客室の出入口及び室内ドアは引戸
- ・トイレに手すりを配置
- ・バスタブとシャワールームに手すりを配置
- ・ルームキー差し込み口を低位置にも配置
- ・各スイッチは低位置に配置(床より1m以内)
- ・クローゼット内、洋服掛けバーを低位置に設置
- ・車いす対応のライティングデスク
- ・トイレは自動洗浄タイプで便器横に非常ボタンを設置
- ・非常時にフラッシュランプで通知する(聴覚障害者配慮)

ハード・ソフト両面のFM手法による改善

UDサービス向上を目指し、基礎知識の学習とサービス改善のための研修を実施



◇第1日目「知識編」
「日本一のユニバーサルリゾート
ホテルを目指して」

はじめに～
「研修の目的」について説明
＜研修開始＞
高齢者/目の不自由なお客さま/歩行の不自由なお客さま/目や耳の不自由なお客さま/
妊娠中のお客さま毎に解説
・接客の心得
・お客さまが困っている点(不自由さ具体例)
・接客のポイント



◇第2日目-1「ホテルの現状把握」
・正面玄関は車道とエントランス床大理石とに段差がないので、車椅子でもスムーズに入館できるようになっている。
・玄関近くの駐車スペースは「国際シンボルマーク」がついた障害者専用駐車スペースとなっている。底があればなお良い。
・エントランスに視覚障害者誘導用のブロック等があれば、ハートビル法適合認定を受けることができる。その際、現在敷いてあるフロアマットが邪魔となる。また入口を示す音などの工夫があると良い。
・聴覚障害のお客さま向けに「耳マーク」を表示し、筆談でお応えできるような環境があると親切。



・高齢のお客さまは、椅子のある低いデスクに誘導するのが一番良い。



◇第2日目-2「疑似体験編」
2名1組とし、3名が体験キットを装着、残り3名がサポートをして館内をお客さま視点で巡回した。(一巡後交代)

＜体験内容＞
①階段の下り
②フロントチェックイン
③ソファからの立上り
④売店での買物
⑤レストラン(ビュッフェ)利用
⑥エレベーター利用



⑦部屋内の利用
・白内障・視野狭窄体験メガネを掛けると、文字が非常に見にくく、書類記入にかなりの時間を要した。
・部屋番号やレストランの利用時間等も大きな文字で書いてもらうなどしないと分からないという意見も出る。
・中腰で左右不均衡の重りを付けて歩くだけでかなりの体力を消耗。参加者は、ソファに腰を下ろし、立上りの体験。高齢者がソファに座ってじっとしている理由を体感。
・エレベーターでは階数を示す案内表示が見えないなど、普段気にかけないところの問題を各自実感した。



◇第3日目「実務反映編」
・高齢者・障害者旅行に携わってきた方から旅行、ホテルでのアドバイス。
・車椅子のお客さまのサポート実習として、実際に車椅子を操作。車椅子のお客さまの椅子やベッドへの移動の介助方法実技。
・倒れてしまった歩行の不自由なお客さまを車椅子に座らせる方法実技。
・参加者全員に今回の研修を終えて、今後の取組み目標を作成してもらう。



【コンサルティング】
バリアフリーカンパニー
中沢信代表



[JFMA HPより引用]

ソラーレホテルズ・アンド・リゾーツ&スパ

ハード面の取り組み。かけた経費は僅かという。



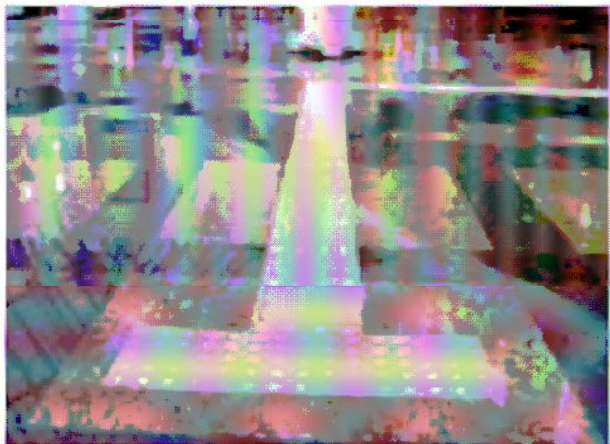
客室のトイレに追加したはね上げ手すり



追加設置したオストメイト対応器具



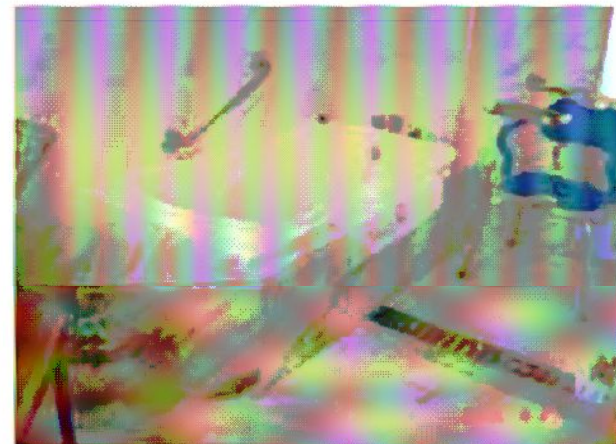
パブリックトイレに手すりを追加設置



ホテルのグレード感を考慮した誘導ブロックの敷設



低位置にルームキー差し込み口を配置し
客室ドアは内外とも引戸



バスタブとシャワールームに手すりを配置

[JFMA HPより引用]

中沢信著 「バリアフリーは儲かる」

- ・バリアフリー(UD)は社会的義務、社会的責任であるというより、むしろ経済的価値、ビジネスそのものに結び付く。
- ・バリアフリー(UD)で売上が上がる。
- ・ビジネスの対象になっていないからこそ、障害のある人は限られた商品やサービスしか選択肢がないのではないか。
- ・バリアフリーが儲かることを知ってもらえば、誰もが住みやすい社会に少しでも近づく。

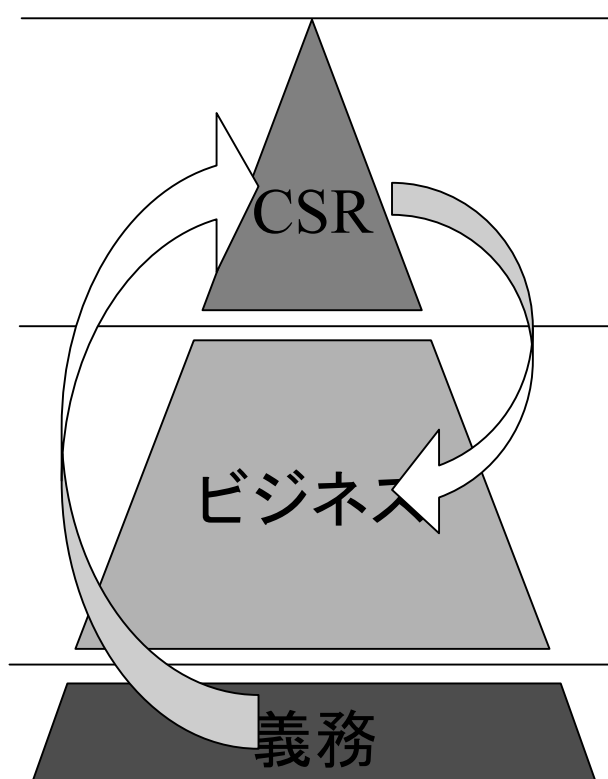


[著者]
バリアフリーカンパニー
中沢信代表



義務からCSRへ、CSRからビジネスへ

「善意」ベースは脆い。ビジネスとして成立することで持続する。

	ポイント	動機	持続性
	企業の姿勢 長期的評価(間接的)	善意 評判	×
	マーケティング (顧客ニーズの発見) 事業に組み込む (事業自体が社会性)	事業自体	○
	最低限の遵守	罰則	○

INDEX

2010年度 UD研究部会の活動

ミッション／UD認証制度へ向けた活動／マンスリーミーティング

ユニバーサルデザインを解くキーワード

- 1 UDの価値を「見える化」する
- 2 オフィスのUDは Design for eachへ
- 3 UDはオフィスの生産性を支えるベース性能
- 4 義務からCSRへ、CSRからビジネスへ
- 5 UDは公共性。しかし使いやすいほどよいのか

5 UDは公共性。しかし使いやすいほどよいのか

- ・社会のすべてのモノは、使いやすいければ良いのか。
- ・社会正義として、ユニバーサルでフラットな社会は必要。
(=特定のユーザーを排除しない設計 →設計の社会性・公共性)
- ・しかし個人レベルで見れば、ゆるい環境が人の能力を退化させないだろう。社会から奥行きをなくさないだろうか。
- ・重要なのは、個人の能力と取り巻く環境の相対的關係。
(=「使いやすさ」レベルの調整)
- ・より、個人レベルにアジャストするUDは考えられないか。
(=新しい観点)

2011.2.9
JFMA FORUM 2011

ご清聴ありがとうございました

お問い合わせ

s-nitana@d8.dion.ne.jp